日独伊三国同盟と第二次近衛内閣

平成22年1月9日・高根台公民館

日本が太平洋戦争に突入する運命は、一年四か月以上も前、昭和十五年七月二十二日に成立した第二次近衛文麿内閣によって決まってしまった――こう言っても、いいでのではないでしょうか。まず第一に、二か月後の九月二十七日、日独伊三国同盟を締結したことです。この軍事同盟によって、日本は現にヨーロッパで戦争しているドイツ、イタリアと結び、アメリカ、イギリスに敵対する態度をはっきりさせてしまいました。日本は、石油をはじめ鉄など重要資源のほとんどを、米英に依存しています。米英の経済圏に入ることよって生存出来るんだという、この一番肝心な基本条件を忘れて、アメリカを敵に回してしまったのです。第二の問題は、北部仏印に進駐して、これらの資源を南方に求める、武力南進の姿勢を示したことです。この後、日米交渉により何とか打開を図ろうとしても、日米開戦が止められなくなる。政治的に引き返すことの出来ない、ほとんどの布石が、この第二次近衛内閣成立の時点でもう終わってしまったのです。

昭和六年九月の満州事変以来、日本の外交は陸軍のペースで進められて来ました。「統帥権独立」を盾に、軍事行動については総理大臣といえども介入を許さず、その後始末に汲々とするのが日本外交の姿でした。さらに日本の外交にとって不幸だったのは、国家としての長期的な指導方針が確立されていなかったことです。このため、その時々の首相、外相による「その都度外交」になってしまったのです。支那事変がそうでしたし、対米英、対ドイツ外交にしてもそうでした。

陸軍が主導権を握った外交は、勢い実力行使をちらつかせる「こわもて外交」となり、外交本来の手段である妥協やギブ・アンド・テイクの原則が棄てられてしまいました。これが時と共に敵を多くし、日本が国際的に孤立する原因ともなったのです。

そして、いつも希望的な観測、こうなって欲しいという期待感が、肝心な場面で、冷静であるべき外交判断の目を曇らせてしまいました。判断ミスの最たるものが、ドイツ勝利を信じてしまったことでしょう。昭和十五年四月から始まったドイツ軍電撃作戦の華々しさに幻惑され、オランダ、ベルギーに続いてフランスが降伏すると、ドイツ軍のイギリス本土上陸作戦は間もなく行なわれ、大英帝国は崩壊するだろう。そう思い込んでしまったのです。日独伊三国同盟と南進という、近衛内閣の二つの重要な国策の決定には「ドイツ勝利」が前提となっていたのです。

近衛首相が、強硬な外交を迫る陸軍を抑えるために、外務大臣に起用した松岡洋右、陸軍以上に強気で、がむしゃらとしか言い様のない松岡外交も大きな誤算でした。松岡は、三国同盟にソ連を加えて、この四国の強大な力で米英に対抗する。そうすれば、アメリカも簡単には対日戦争に踏み切れまい。その間に行き詰まっている日米関係を打開し、支那事変も解決出来るだろう。そう考えたのですが、この松岡構想もまた、ドイツ勝利だけではなく、昭和十四年八月二十三日に結ばれた独ソ不可侵条約によって、ドイツとソ連の親密な関係は続くだろう。この錯覚が前提になっていたのです。しかし、ドイツ軍はイギリス本土に上陸出来なかったし、それどころか翌年の十六年六月には独ソ戦争が勃発してしまいました。この前提が崩れれば、日米戦争が避けられなくなる必然性があったわけです。ドイツ過信からくる判断ミス、ここに日本の大きな不幸がありました。

日本とドイツの間は、独ソ不可侵条約という突然の裏切りで、一時的には冷え切ったものになっていました。日本に従来の日独防共協定を強化して、三国同盟を結ぼうと働きかけてきたのはドイツなのです。陸軍が大いに乗り気になって、何とか同盟を結ぼうと躍起になっている時に、そのドイツがソ連と握手してしまったのですから、防共協定そのものが全く無意味なものになってしまいました。さしもの「三国同盟論」も、シャボン玉のようにケシ飛んだはずだったのですが、これをあっという間に打ち消したのがドイツ軍の電撃的な勝利だったのです。昭和十五年四月九日にデンマーク、ノルウェーに侵攻し、デンマークはわずか三時間で降伏しました。北海を制圧して背後を安全にしたドイツ軍は、五月十日には戦車部隊と落下傘部隊を主力に、ベルギー、オランダ、ルクセンブルクに攻め込みました。戦闘は一方的で、三国の首都はその日のうちに陥落しましたし、フランスが難攻不落と豪語していた要塞マジノ線もたちまち突破され、六月十四日にパリが陥落すると、フランスも二十二日に降伏したのです。

国民の親独熱は再燃しましたし、マスコミも競ってムードを盛り上げました。日本国内は「バスに乗り遅れるな」の大合唱です。そして時の内閣、海軍の米内光政内閣を倒して、近衛内閣により三国同盟を結ぼうと、素早く動き出したのが陸軍でした。近衛の唱えている新体制運動も、陸軍の歓迎するところでした。「ドイツ勝利の根源は、ナチスの一党独裁体制にある」と、同じような一国一党組織を考えていたからです。もっとも近衛自身は、自殺の直前に書いた手記に「内閣は統帥に操られる弱い造作に過ぎなかった」として、「既成政党とは異なった国民組織、全国民の間に根を張った組織と、その政治力を背景とした政府が成立して、初めて軍部を抑え、日支事変の解決が出来るとの結論に達した」。こう書いているように、国民世論をバックに軍部を抑えるための新体制運動だったと言うのです。しかし、道具立てだけは一生懸命でも、いざ実行となると、決断も実行力もないのがこの貴公子のスタイルなのですが、近衛が六月二十四日、「新体制

確立のために微力を捧げたい」と声明して、枢密院議長を辞職すると、米内内閣倒閣運動に拍車がかかることになったのです。

この間陸軍は、こうした世界情勢の急変に日本はどう対処すべきか――「時局処理要綱」の作成を急いでいましたが、七月四日、海軍側に陸軍の案を提示しました。「支那事変を解決すると共に、好機を捕捉して南方問題の解決に努める」という内容です。南方問題というのは、イギリス、フランス、オランダが東南アジアに持っている広大な植民地、そこには日本が欲しい石油や鉄、ゴム、錫といった重要資源が山ほどあります。本国支配が揺らいだスキに南方に進出し、日本の慢性的な資源不足を一挙に解消してしまおうというのです。提案説明をした参謀本部作戦課長の岡田重一大佐は、重大な発言をしています。「第一に、南方に武力を行使する場合には、独伊軍事同盟に入ることになる。第二に、強力な政治機構の確立については、少数閣僚主義がよい。外相には松岡洋右の実力を買っている。陸相には東条英機か山下奉文がよかろう」。つまり、陸軍はこの時点でもう「南進」と「三国同盟」をセットにするという、近衛内閣の重要国策から主要閣僚まで決めてしまっおり、全てはこの陸軍の目論み通りに展開されるのです。三国同盟に反対してきた米内が首相である限り、三国同盟も武力南進も出来ないことははっきりしています。そこで陸軍は、陸軍大臣の畑俊六に辞表を出させ、後任の大臣を送らないことで米内内閣を倒したのです。

後継首相推挙のイニシアティブは、この時、元老の西園寺公望から六月に内大臣になったばかりの木戸幸一に移っていました。西園寺が高齢と病気を理由に辞退したためですが、戦前、内閣とは関わりのない二人の大臣がいました。一人は宮内大臣で、現在の宮内庁長官に当たります。もう一人が内大臣で、明治十八年内閣制度創設の際に宮中に設けられ、常時天皇の側にあって、政治問題など天皇の相談役を務める重要なポストです。木戸は、後継首相の選考に枢密院議長、首相経験者、内大臣をメンバーとする重臣会議方式を初めて採用したのです。当時四十八歳、「若きプリンス」近衛の再登場を求める声は、陸軍だけではなく、ほとんど国民世論になっていましたから、重臣会議は十七日、ほんの三十分ほどの協議で後継首相に近衛を推薦しました。

同意を求められた西園寺は、「自分はもう老齢であり、実際世の中のことは的確にわからない。自分は何とも言えない。この奉答だけは御免蒙りたい」。こう言って、近衛推薦に積極的な姿勢を見せませんでした。そして「今頃人気で政治をやろうなんて、そんな時代遅れの考えじゃあダメだね」と、近衛の政治姿勢を批判したそうです。次の指導者として近衛に期待し続けてきた西園寺でしたが、優柔不断、軍部に押されっ放しだった第一次内閣の実態に、その期待は冷えきっていたのです。西園寺は常々、「政治は眼前のことを裁いて行くのが大事だ」――こう言っていましたが、近衛は肝心な問題となるといつも逃げてしまいました。

西園寺はまた、「ドイツ一辺倒」に染まっていく風潮に、危ないものを感じていたのでしょう。時事新報の社長をしていた小山完吾への手紙で、「ただびっくりするのは、ドイツの反覆表裏、ことに宣伝に巧妙なのは、みんなよく知っていることだと思っていたところ、今に至って一向にこのことに注意しない連中がいることだ」と書いています。しかし、ムードが支配する当時の軍国日本では、ドイツ軍の威勢のよさばかりに目が向いてしまって、警戒感を持つ人はごく少数でした。私が感心するのは、元陸軍大臣の宇垣一成、早くから「政界の惑星」と期待されながら、陸軍の反対で首相になれなかった宇垣が、第二次大戦勃発の日に早くもドイツ敗北を予測していることです。昭和十四年九月一日の日記に、こう書いているのです。「独、英両勢力を比較するに、結局国力戦となれば独の敗亡に帰することは明かである。ヒットラーにして賢明であり、真に祖国を思うならば、戦争に突進することなく避けるべきであると思惟するも、彼もナポレオン式の成金豪傑であるから、乾坤一擲自己の名誉欲、功名心を満足せしむる為、祖国を賭しても大博打を打ち兼ねまじき男である」。戦争というものは、一時的な勝利ではなく、最後は国力戦であり、生産力、科学、技術の高さが物を言うのです。日本が太平洋戦争に負けたのもそうでしたし、陸軍首脳部に宇垣のような先を見る総合判断力がなかったのは、何とも残念なことでした。

木戸幸一は、この第二次近衛内閣以来、内大臣として日本の運命に関わる重要な役割を果たすことになります。と言いますのは、昭和天皇は立憲政治の建前から、内閣の決定、上奏に対しては、たとえ自分の考えとは違っていても、許可されることにしていました。憲法を守るという点では、昭和天皇ほど真面目で厳格な方はいなかったでしょう。よく「司司」、国会答弁でも「司司が粛々と進める」なんて言いますが、天皇は帝王学を学ばれた時、この「司司」と云う政治原理を徹底して受けられたようです。陸軍大臣にしろ外務大臣にしろ、国務大臣には官制で決まった仕事の分担がありますが、このことの上奏については十分聞かれる。ところが、例えば外務大臣が所管事項の話をした後で、「近頃の陸軍は…」などと言うと、それはもう聞かれない。所管外のことだと言うのです。

ですから、その天皇にとって、政治的な大きな問題の相談相手、その人の言うことなら聞く相談相手は誰かとなると、それは常時輔弼の任に当たる内大臣なのです。維新の元勲木戸孝允の妹の孫で、木戸家を継いで侯爵となった木戸は、元老西園寺に代わる天皇の相談役として、大きな地位を占めることになります。内大臣秘書官長、厚生大臣、内務大臣を歴任し、近衛とも京都大学同窓で親しく、木戸は家柄、経歴から言っても、内大臣になることを運命づけられていたとも言えます。しかし、やがて主戦論の東条を首相に推薦したように、政治判断、その見識となると、とても西園寺には及ばなかったように思います。

近衛は新体制運動の高まりと共に、早くから再び首相になる決意を固めていた

ようです。一か月ほど前のことですが、西園寺の秘書役原田熊雄が荻窪の近衛の私邸荻外荘を訪ねると、口では「とても引き受ける自信がない」と言いながら、別室に来ていた松岡の方を指差し、「松岡の外務大臣はどうだろう」。原田は「また近衛の新しい物好きが始まったな」と思ったそうですが、近衛の意中の外相は、もうこの時から松岡だったのです。松岡は国際連盟脱退の立役者です。連盟臨時総会で満州国が否定されると、肩をそびやかすようにして日本代表団を率いて退場、大衆向けを狙った派手なポーズで国民的な英雄でした。それまで代議士として所属していた政友会を脱党し、政党解消を唱えて全国遊説をするかと思えば、古巣の満鉄に戻って総裁に就任する。常に派手な動きで世間の注目を集めてきました。そして大正十年、四十一歳で外務省をやめた時、「いつかは大臣になって帰ってくる」。こう見えを切ったように、外務大臣になることが悲願だったのでしょう。その頃の松岡の猟官工作は猛烈なもので、近衛の秘書官だった牛場友彦の話だと、「草履取りでもいいから、近衛さんに仕えさせてくれ」と頼んだそうです。何だかんだと口実をつけては近衛詣でをするので、女中さんたちのつけたあだ名が「なりたやさん」でした。

その松岡は、昭和十五年一月、英米協調の米内内閣に公然と反旗を翻し、内閣参議を辞任すると、近衛を訪ねて熱弁を振るっています。「今どき八方美人的外交などあり得るはずがない。米国の主張に屈して支那事変以前の状態に立ち還るのでない限り、日米関係の将来は衝突の事態に立ち至ることは免れない。外交の方針は、この線に沿って立てられなければならぬと思う」。つまり「ドイツ枢軸寄りの外交をしろ」ということで、近衛は七月十二日、まだ米内内閣が総辞職する前ですが、松岡を軽井沢の別荘に密かに招いて外相就任を要請しています。と言うことは、近衛が首相になる決意をした時、政治同盟にするか軍事同盟にするかは別として、すでに三国同盟を考えていたことになります。

十七日の夜、近衛が組閣の大命を受けると、興亜院政務部長の鈴木貞一陸軍中将、戦争中企画院総裁として戦争経済を担当した鈴木から電話がかかってきました。「三国同盟はペンディング、懸案中のものにするのか」。近衛は「それではとても組閣出来ない」と、即座に否定したそうです。これは近衛のブレーンだった矢部貞治東大教授が書いているのですが、近衛は鈴木に「平沼、阿部、米内の三内閣の政情不安の根本原因は、三国同盟問題だった。これを推進するのは陸軍であり、陸軍の主張を容れなければ政情は安定しない。勢い同盟の方向を認めざるを得ないだろう。それが政治家としての常識的感覚であろう」と言っています。政治情勢が安定するのなら、同盟も結構ではないか。三国同盟のもたらす対米戦争の危険性より、陸軍に同調して安定内閣を作ることの方が近衛の政治感覚だったのです。

近衛はまた、矢部にこうも言っています。「大命に際し、天皇は通常、憲法尊

重、英米協調、財界に動揺を与えないこと、この三ヵ条の注意を与えられる。自分としては、そのままでは大命を拝受するわけにはいかない。憲法の解釈が時代と共に変化しなければならないし、また現下の国際情勢では英米の態度に鑑み、その英米との交渉をやるためにも、ある程度独伊との関係を強化する必要もあることにつき、率直に申し上げて御許しを得たい」。まあ、五摂家筆頭の近衛だからこそ、天皇に対してこんなことが言えるのであって、天皇の前で膝を組んで話したりするのは近衛だけだったそうですが、この近衛の要望は内大臣の木戸を通して天皇に伝えられました。天皇としても、重臣会議の推薦があり、近衛が大命を辞退するとあっては、憲法遵守、英米協調を命ずるわけにはいかなかったのです。それでも気懸かりだったのでしょう。近衛に組閣を命ずる際、「内外時局重大の際故、外務、大蔵両大臣の人選には特に慎重にするように」と言われたのですが、それも、近衛が早々と松岡を外相に決めてしまっているのですから、どうにもならないことでした。

それにしても近衛は、万事横紙破りで、周りからも反対のあった松岡に、どうしてそれほど執着したのでしょうか。強硬な外交を迫る陸軍を抑え込むには、いわゆる英米派ではダメだ。口では、一見陸軍の上を行くような強硬論を唱えながら、「三国同盟こそが日米戦争を回避する道だ」。こう主張する松岡に、共鳴するものがあったのではないでしょうか。そして「毒を以て毒を制する」式の人事。自分は矢面には立たずに、面白そうな人間を取り立て、役に立たなくなればあっさり使い捨てる。このやり方は近衛人事の特徴でしたが、あるいは公家貴族に何百年来染み込んでいる保身の術だったのかも知れません。

十八日の夜には、陸軍軍務局長の武藤章少将が近衛を訪ねてきました。陸軍で決めた「総合国策要綱」を示し、「本案を了解の上、政策の基本とされるなら、陸軍は新内閣に対して万全の協力を惜しまない」。裏を返せば「承知しないなら内閣の寿命は長くないぞ」と、半ば脅しの口上です。「帝国ノ国是ハ八紘ヲ一宇トスル肇国ノ大精神ニ基キ、帝国ヲ核心トシ、日満支ノ強固ナル結合ヲ根幹トスル大東亜ノ新秩序ヲ建設スルニ在リ」。こういう根本方針に始まり、国防国家と大東亜新秩序建設の外交など、二十項目の具体的方針を示したものですが、近衛はあっさり受け入れ、二十六日に「基本国策要綱」として閣議決定したのです。

「八紘」とは世界のこと、「一宇」の宇は屋根の意味で、世界を一つ屋根の下に治めるということですが、戦争中、日本の海外進出を正当化するために盛んに使われた言葉です。政府の公式文書に、こんな神がかった表現が使われたのは初めてのことで、外交文書も八月一日から、それまで「帝国」と書いていたのが「皇国」に改められました。西園寺は「どうも皇室や神様を担いで、世の中を悪化させようとするような情況があるじゃないか。これは困ったことだ」と嘆いたそうです。

そして、これに先立つ七月十九日、有名な「荻窪会談」が荻外荘で開かれたので

す。集まったのは、外相候補の松岡、陸軍が陸相候補として推薦している航空総監の東条英機中将、海軍が海相に留任を決めている吉田善吾中将です。普通なら内閣の重要な方針は、組閣してから閣議で決めるものですが、この「荻窪会談」が特異なのは、まだ内閣が出来ないうちに主要閣僚候補を集めてやってしまったことです。会談を終始リードしたのは松岡でした。松岡が予め用意した「四柱会議決定」、四つの柱と書きますが、陸軍の「時局処理要綱」を土台としたもので、これを中心に話し合いが行なわれ、ここで決まった方針は二十七日の大本営政府連絡会議で、「世界情勢ノ推移ニ伴フ時局処理要綱」として決定されたのです。

要綱の概要はお手元の資料に書いておきましたが、日本の運命に関わる重大な内容を含んでいるものでした。一言で言うなら「北守南進」、北は守り南に進むということで、第二次世界大戦に当たって宣言をしていた「不介入方針」の放棄でした。ノモンハンの敗戦に懲りた陸軍は、差し当たり北進はあきらめ、独伊との提携を強化して日ソ関係の改善に努める。その一方で、英仏蘭の本国支配が揺らいだ隙に武力南進し、イギリス一国ならば戦争も辞さない。こういう重大な方針を決定したのですが、要綱全体を通じて言えることは、「ドイツがイギリスを打倒するのは確実だ」という前提に立っていることです。参謀次長の沢田茂中将は二十九日、天皇に「この要綱は、ドイツがどの程度成功を収めるか否かが問題であり、ドイツの対英作戦が成功した際に、この案のように行なわれるものです」。こう内奏しましたが、天皇の不安を感じたのでしょう。翌日、侍従武官長を通じて、「日本が自力で南方解決などは考えていない。あくまで他人の褌で相撲をとる心算である」と奉答しています。「他人の褌」とは、ドイツに依存することですが、武力南進を行っても「戦争対手を極力英国のみに限定する」。つまり、イギリスと戦争になってもアメリカは出てこないだろう。米英は分けられる、米英可分を前提としていますが、アメリカとイギリスとの長い間の関係、第二次大戦が始まってからのアメリカの本格的な対英援助を考えれば極めて安易な判断でした。

しかも問題なのは、「対米開戦は避け得ざるべきことあるべきを以て、これが準備に遺憾なきを期す」と、実質的な対米戦の準備を発動したことです。当時、海軍はもちろん、陸軍だってほとんど対米戦の意志は持っていなかったのですから、ここは「対米戦の恐れのあるような南方武力行使は、絶対に行なわず」と規定すべきだったのです。このブレーキをかけなかったものですから、やがて北部仏印に進駐した時、話し合い進駐、平和進駐が出来たのに、武力進駐に走ってしまい、アメリカとの対立を深める結果になってしまいました。

こうして見ると、翌年の十六年にかけて日独伊三国同盟、北部仏印進駐、日ソ中立条約、南部仏印進駐と、結果的には太平洋戦争に至るシナリオは、全て近衛内閣成立前のこの「荻窪会談」で確認され、選択されたと言えるのです。もっとも海軍大臣の吉田善吾は戦後になってからですが、この「荻窪会談」について「他愛

のないフリー・トーキング程度のもので、三国同盟は一切話題にならなかった」と言っています。しかし松岡の残している記録には、「日独伊三国枢軸の強化」と明記されています。この枢軸強化がはっきり軍事同盟になっていたら、米内や連合艦隊司令長官の山本五十六同様、三国同盟に反対の立場をとっていた吉田は、当然反対していたでしょう。ただ吉田という人は、やがてこの同盟問題でノイローゼになったように、神経が細すぎました。近衛内閣が国民の期待を担ってこれからスタートしようという時、「軍事同盟でなく、政治的結束の強化なら問題はない」と、どこか遠慮し、自分を納得させる気持ちがあったのではないでしょうか。

「荻窪会談」を受けて、枢軸強化をどうするか。二十二日の陸海軍の協議で、この日は近衛内閣が成立した日ですが、強硬に軍事同盟を主張したのが武藤軍務局長です。沢田参謀次長に至っては、「日本はやむを得ない場合には、ドイツ、イタリアと共に滅亡する覚悟をすべきだ」。こうまで言いましたが、海軍は反対です。結局、海軍の強い要請により、「日本はドイツが軍事同盟を迫った場合に初めて、その締結の可能性を考える」こととし、この時点では「政治的提携の強化に努力する」。こういう妥協案に陸軍も同意したのです。当時、参謀本部参謀の原四郎大尉は、「軍事同盟と言っては海軍が同意しないので、これはタブーのようなものになっていた。陸軍は外務省に対しても、軍事同盟という言葉を一度も使っていない」と話しています。ですから八月六日、陸海軍と外務省の事務当局の協議で決まった「日独伊提携強化策」でも、イギリスを対象に、政治的、経済的提携強化の範囲に止まるものだったのです。例えば「独伊の対英戦争遂行を容易にするため、日本は為し得る限り協力す」。この条項で日本が具体的に何をするのかと言えば、せいぜい極東でのイギリス権益の排除、示威宣伝による協力、イギリス植民地での独立運動支援といった程度なのです。

これの「対英政治同盟」を、アメリカまで含めた軍事同盟にしてしまったのは、外務大臣の松岡でした。松岡は八月一日、まずドイツのオット大使を招いて打診を始めたのですが、ドイツ側の反応は極めて冷ややかなものでした。独ソ不可侵条約以来しっくりいってなかったのに、日本がドイツ勝利を見て擦り寄ってくるのは、今さら何だというわけです。当時ドイツに駐在していた陸海軍武官の話でも、ドイツは勝利に酔っていたのでしょう。「いま日本と格別に協力し合う必要はない」と、日本を友好国扱いする空気は全くなかったそうです。

それが突然、八月二十四日になって、「リッベントロープ外相の特使として、スターマーを三週間の予定で日本に派遣する」と言ってきたのです。スターマーは日独防共協定以来、日本との交渉に当たってきたリッベントロープの腹心でしたから、松岡も「ドイツも枢軸強化を決意したのだ」と受け取り、さっそく同盟交渉の準備にかかりました。しかしドイツの態度急変は、一体何だったのか。スタ

ーマー急派の裏には、ドイツ側に積極的に対日接近を図らなければならない事情が生まれたからであって、日本はそれを読み取らなければいけなかったのです。

まず第一に、軍部が「時間の問題」と見ていたイギリス本土上陸作戦の挫折です。ヒットラーはポーランド侵攻のため、独ソ不可侵条約を結んで英仏との戦争に入りましたが、ヒットラーの本心はもともとが共産主義撲滅であり、本能寺はソ連だったのです。フランスの降伏で西ヨーロッパを制覇すると、この辺でイギリスと講和し、連戦連勝の機械化部隊で一気にソ連に攻め込みたかったのでしょう。六月十九日にイギリスに和平を提唱したのですが、チャーチル首相から一蹴されてしまい、怒ったヒットラーは七月二日、「制空権を獲得次第、イギリス本土上陸作戦を敢行する」。こういう方針を決定すると、十六日「シー・ライオン作戦、アシカ作戦」と名付けた上陸作戦を発令、八月半ばまでに作戦準備を完了するよう命じたのです。

こうしてドーバー海峡の制空権確得を目指して、七月十日から「バトル・オブ・ブリテン」と呼ばれた英独航空決戦が始まりました。ドイツ空軍はその総力を挙げて二千七百機を動員しましたが、ロールスロイスのエンジンを搭載したイギリスの新鋭戦闘機スピットファイは優秀でした。しかもドイツの戦闘機メッサーシュミットは航続距離が短いため、イギリス本土上空まで爆撃機を援護出来ません。ドーバー海峡にレーダー網を整備したイギリスは、侵入して来るドイツ爆撃機の進路を的確に捉え、待ち伏せ攻撃をして数で優るドイツ空軍を圧倒したのです。十月までにイギリスの損害九百十五機に対して、ドイツは倍近い千七百三十三機が撃墜されました。イギリス海軍の存在を考えれば、制空権なしにはドーバー海峡は渡れません。ヒットラーは八月の末、上陸作戦を一時延期、九月十七日にはついに「翌年春までの延期」を決定し、英国史上最大の危機は去ったのです。

ヒットラーが異常なのは、イギリス屈伏が難しそうだとなると、矛先を本来の狙いであるソ連攻撃に変えたことでした。七月三十一日、この日は松岡がドイツに日独提携強化を持ちかける前日ですが、ベルヒテスガーデンの山荘に国防軍首脳を集めると、対ソ開戦の決意を明らかにしたのです。ハルダー参謀総長のメモが残っていますが、それによると、ヒットラーはドイツ海軍がイギリス海軍の一五％しか力がないこと、従って英本土上陸作戦に悲観的な見通しを述べた後、こう言ったというのです。「イギリスの希望はソ連とアメリカだ。しかし、ソ連にかけた期待が消えれば、アメリカへの期待も消えてしまう。なぜなら、ソ連の消滅は、極東での日本の価値を巨大なものに高めるからだ」。アメリカは日本に対する警戒で手いっぱいになるだろうと言うのですが、ヒットラーは「それ故にソ連はこの戦争中に打倒されねばならず、対ソ戦の開始は一九四一年、昭和十六年五月、戦争遂行には五ヵ月を当てる」と締め括っています。

事実は一ヵ月ずれただけで、十六年六月二十二日に独ソ戦が勃発するわけです

が、独ソ不可侵条約で友好的に見えた独ソ関係は、この頃には急速に悪化していたのです。ルーマニアの石油をめぐる対立です。不可侵条約の秘密議定書には、「ルーマニアのベッサラビアに対するソ連の関心を、ドイツは承認する」。つまり領有を認めていましたが、ソ連は十五年六月二十八日、ベッサラビアに出兵すると隣接の北部ブコヴィナ地方まで併合してしまったのです。この地方は、ヨーロッパで石油を産出する唯一の地域です。日本はアメリカの石油全面禁輸にあって対米戦争に突入することになりますが、ドイツにとっても石油は戦争遂行には欠かせないものです。ましてイギリスとの戦いが長期戦になりそうだとなると、ヒットラーはまずルーマニアの石油を確保し、それだけでは足りないのでコーカサスの油田も狙って、対ソ戦を決意したのではないでしょうか。

そこへヒットラーを慌てさせたのが、アメリカの強硬姿勢です。イギリスの危機は、同時にアメリカの危機でした。アメリカ議会の上下両院は七月十一日、海軍拡張案を満場一致で可決しましたが、七年間で戦艦三十五隻、航空母艦二十隻など艦船七百隻、軍用機二万五千機という大軍備拡張計画です。ルーズベルト大統領は八月十七日、カナダのキング首相と会談して共同防衛会議の設置を決めましたし、チャーチル首相も二十日、「西半球の海軍基地をアメリカに提供する見返りに、五十隻の駆逐艦をアメリカから譲り受ける」と発表したのです。

アメリカの対独参戦が、次第に現実味を帯びてきました。ヒットラーの対英戦争は、アメリカが参戦しないことを前提にしています。こうなれば、アメリカの参戦を食い止める有力な手だては、日本に牽制させるしかありません。アメリカを中立状態に止めておく手段として、日本との軍事同盟がヒットラーによってにわかに取り上げられることになったのです。スターマー急派の裏には、こうした事情があったのですが、松岡が三国同盟交渉に入る前に、ドイツ勝利の前提も、ソ連を入れて四国同盟にする構想ももう崩れていたわけです。

まさに、日本だけが知らなかったわけですが、情報はあったのです。ソ連駐在の東郷茂徳大使、それまでドイツ大使をして、開戦前に東条内閣の外相になった東郷は、「独ソ関係の悪化」を外務省に報告していました。戦後の首相吉田茂がさすがだなと思うのは、近衛首相に手紙を書いて「スターマー急派はおかしいぞ。向こうに弱点があるから、交渉を急いでいるんだ」と、ちゃんと警告していることです。吉田は十四年にイギリス大使を退官して浪人生活に入っていましたが、「日独軍事協定の内容は知らないが、ドイツの勝利を予想してのことだから、その特使特派の事実こそ、ドイツ自身勝敗の確信に動揺している証拠だ」と、いかにもベテラン外交官らしい鋭い情勢分析をしています。

ただ、松岡という人は大変な自信家で、何でも「俺が俺が」で押し通します。松岡と満鉄理事時代から親しく、松岡の下で外務省顧問になった斎藤良衛に言わせると、「博覧強記で、何でも知っている。他の閣僚でも、総理でも、みんなやら

れる。太刀打ち出来ない」。武藤軍務局長など「属僚は黙っておれ」と一喝されたそうですが、松岡の秘書官をした外交評論家の加瀬俊一さんは、こう言っています。「一個の天才で、その発想は電光のように鮮烈だ。早朝でも深夜でも、何か思いつくと矢継ぎ早に指示してきたが、陣頭指揮というより単騎突出の感じだった」――自信過剰からくる個人プレー。しかも自分の考えに酔ってしまう人で、ソ連を入れた四国同盟を考えた時、自分の構想とは違う情報には目もくれなかったのです。

松岡は就任早々の八月二十二日、「松岡旋風」と言われた外務省の大人事異動をしています。何しろ代わらなかったのはイギリス大使の重光葵くらいのもので、英米派の東郷大使ら四十人に帰国命令を出し、局長クラスも一新してしまいました。吉田茂は、近衛への手紙で「暴挙であり、外務省内には不安の空気満ち、機能停止状態」と批判していますが、松岡とすれば「出先は誰でもいい、外交は自分一人でやる」くらいの気持ちだったのでしょう。三国同盟締結後に帰国した東郷が、近衛首相に「独ソ関係は変調を来しており、日ソ関係よりも悪いくらいだ」。こう報告すると、近衛は「初めて聞く話だ」とびっくりしていたそうです。情報がどこかで止まってしまって、総合判断に生かされない。あの頃の日本の組織的な欠陥でした。

イギリス本土上陸作戦にしても、海外の陸軍駐在武官からは「難しそうだ」という情報が、幾つも寄せられていたのです。スウェーデン駐在の西村敏雄大佐は、「ドイツ軍の上陸用舟艇は、上陸作戦に必要な量だけ準備されていない」。イギリスの辰巳栄一少将も「イギリスはアメリカの支援で危機を脱し、航空戦もイギリス優位に向かっている」。こう報告していましたが、ドイツべったりの参謀本部情報部長若松只一少将にに、「ドイツに不利な情報は良くない」と握り潰されてしまったのです。西村は「英米寄りの情報ばかり送ってくる」と更迭されましたが、代わった小野寺信大佐も、一貫して「英本土上陸作戦はない。ドイツはむしろソ連に開戦準備中だ」と報告したところ、参謀本部からは「英米の宣伝に乗せられている」と叱責電報がきたそうです。そして、ドイツはとっくに断念しているというのに、「英本土上陸作戦はいつか、時期を知らせせよ」と督促して来たというのですから、お粗末の限りでした。

それにしても驚くのは、アメリカは八月の末には独ソ戦の情報を握っていたことです。ベルリンのアメリカ大使館商務官サム・ウッズの所へ、一枚の映画指定席券が送られてきました。送り主は反ナチ運動をやっているドイツ人の友人で、薄暗がりの映画館でウッズの横に座ると、一枚の紙切れをポケットに滑り込ませたのです。「ヒットラーの司令部で、対ソ戦の準備についての会議が開かれている。英国空襲は、不意にソ連を攻撃しようという準備を隠すための煙幕だ」。報告を受けたハル国務長官は半信半疑でしたが、ＦＢＩなどに調べさせた結果、そ

れを裏付ける情報が次々と届き、アメリカは独ソ戦を確信するようになったと言います。情報には裏をとる、それを突き合わせて総合判断をする。この作業が大切なのですが、日本はドイツ勝利を信じ、また念ずる余り、ドイツに不利な情報には目をつぶってしまったのです。

こうした中、スターマーは九月七日に来日しました。日本側はドイツの肚は何も知らぬまま、またドイツをめぐる客観情勢の変化にも何一つ気付かないまま、日独伊三国同盟交渉に入ることになるのです。

×　　×

米内光政は、親しくしていた慶応義塾塾長の小泉信三、戦後いまの天皇の教育係をした小泉に、「私では三国同盟もやらず、国内改革も実行しないからというので、倒閣になったのです」。こう話していますが、近衛内閣のもと、日本がだんだん思わぬ方向に流されていくのを強く感じていたのでしょう。昭和十五年八月、首相を辞職して暇になった米内は、生まれて初めて日光見物に出掛け、旅先からクラスメイトの荒城二郎海軍中将にこんな手紙を出しています。

「魔性の歴史といふものは人々の脳裡に幾千となく蜃気楼を現はし、またその部分部分を切り離して、種々にこれを配列し、また自らは姿を晦ましておいて、所謂時代政治屋を操り、一寸思案してはこの人形政治屋に狂態の踊りを踊らせる。踊らせられる者は、こんな踊りこそ自分らの目的を達することの出来る、見事にしてかつ荘重なものであると思ひ込んでしまふ。かくして魔性の歴史といふものは、歩一歩と思ひもよらぬ険崖に追詰むるものである」。米内の言う蜃気楼とはドイツの勝利であり、時代政治屋とは近衛首相であり松岡外相です。米内は続けています。「然し荒れ狂ふ海が平穏にをさまるときのやうに、狂踊の場面から静かに醒めて来ると、ハテ、コンナ積りではなかったと、驚異の目を見張るやうになって来るだらうと思ふ」。

まさに日本はそうなっていくわけですが、米内が指摘した「思いもよらぬ崖っ淵」、つまり日米戦争に追い詰めたのは、何と言っても日独伊三国同盟であり、これが日本の分かれ道でした。しかも、この三国同盟が特異なのは、交渉がほとんど松岡一人によって行なわれ、交渉に入ってから調印まで二十日足らず、電撃的とも言えるスピード調印だったことです。ある程度経緯を知らされていたのは外交顧問の斎藤良衛ただ一人、外務次官も事実上何も知らされなかったし、武藤軍務局長など陸軍の軍人にも、交渉への関与を一切許さなかったといいます。

松岡はスターマー来日の前日、九月六日の四相会議、首相、外相、陸海軍大臣の主要閣僚会議で、いきなり「軍事同盟に関する方針案」を持ち出すと、承認を取り付けてしまったのです。一ヵ月前に陸海軍と外務省の事務当局で決めた交渉案では、「対英政治同盟」になっていたのですから、寝耳に水の根本方針の大転換でした。松岡一人で「対英」に「対米」を加え、しかも軍事同盟にしてしまったのです

が、松岡にこの決意させたものは何だったのか。松岡は、秘書官の加瀬俊一さんにこう言っています。「僕の登場がもう少し早かったら、三国同盟を結ぶ必要はなかったろう。今となってはこの他に方法はない。だが終局目的は日米了解の達成にある。僕には成算がある。まあ見ていたまえ」と自信満々だったそうです。

加瀬さんに言わせると、松岡はドイツが好きではなかったといいます。廻船問屋の実家が倒産したため、十三歳で渡米、皿洗いなど苦学してオレゴン大学を卒業、明治三十七年、日露戦争が始まった年の外交官試験に合格しました。「アメリカは第二の母国だ」と言っていましたし、自分の家によく招くのも英米の大使であり、アメリカの政治家、財界人、新聞記者でした。オレゴン大学の総長は、「ここにアメリカの真の友人がいる」と誇らしげに言ったそうです。それでいて松岡が強硬な対米政策をとったのは、この少年時代の留学体験が松岡に極端な対米観を持たせたようです。

カリフォルニアの北隣にあるオレゴン州は、東洋系の移民が多く、人種差別による排斥運動の激しい所でした。そんな中で苦労して、「アメリカ人に対する時は、どんなに相手が強そうに見えても、こちらに理があれば譲ってはならない。殴られたら殴り返さなければならない。一度でも威圧に屈したと見られたら、二度と頭を上げることは出来なくなる」。「毅然たる態度をとらねばならぬ」が松岡の口癖でした。「アメリカの対日感情は極端に悪化しているから、わずかなご機嫌とりで回復するものではない。ただ日本の毅然たる態度のみが戦争を避ける道だ」と言うのです。

そこで松岡が、「日本の毅然たる態度」として考えたのが、米英の反対陣営であるドイツ、イタリアと結び、まず日本の外交的地位を高めることでした。外交顧問の斎藤が「ドイツ、イタリアで大丈夫だろうか」と疑問をぶつけると、松岡は「僕は同調者が独伊とは言っておらんよ」。「他にそういう国があるだろうか」と言う斎藤に、「あるとも、ソ連だ」。独伊だけでは力が足りないが、これにソ連が加わることによって米英との均衡が成り立つ。この勢力均衡の上に、初めて日米の了解も出来る。松岡は、斎藤に言ったそうです。「スターリンとじかに交渉しても、うまくいかない。仲介者が必要だ。それはヒットラーしかいない。ヒットラーならこの話の橋渡しが出来る」。松岡は、そのために三国同盟は意味があると考えていました。ドイツとの同盟は、ソ連との同盟のためのステップに過ぎず、そしてソ連との同盟も、アメリカとの和平のための方策だ、と言うのです。

それにしても、軍事同盟には反対だった海軍が、どうして軍事同盟を前提とした交渉に同意したのでしょうか。実は、海軍大臣が吉田善吾から及川古志郎大将に代わっていたのです。吉田は、近衛内閣の政策、海軍部内にだんだん強まって来ている枢軸熱に危ないものを感じたのでしょう。八月二日、海軍省、軍令部の幹部を集めて訓示しています。「日本海軍は、アメリカに対して一年しか戦い得

ない。国策の運用に関し、海軍は牢固たる決意を持つ必要がある。決して引きずられてはならない。ドイツ側の流す甘い情報を軽率に信じてはならない」。沈痛な表情で自重を促したのですが、閣内で孤軍奮闘している吉田の焦りがそのまま伝わってきます。

しかし皆になるには信念も大切ですが、それ以上に体力が必要でした。米内の時と違って、次官に山本五十六はいないし、軍務局長に井上成美もいません。過度の心労と疲労から狭心症の発作で入院、九月四日辞表を出したのです。翌日横須賀鎮守府長官の及川が後任の大臣になったのですが、三国同盟問題に予備知識もなければ、十分検討する時間もないまま、六日の四相会議に臨んだわけです。しかも井上が「相手が日本陸軍という、陸軍第一、国策第二の存在であるのに、誰が及川を大臣に持ってきたのか、不謹慎極まる人事であった。あの定見のない無能ぶりを、陸軍が承知していて、近衛あたりに推薦したとしか考えられない」

―こう言っているように、及川は「玄人はだしの漢学者」。こんな定評があるほど、暇さえあれば漢学の本を広げ、温厚ではあるが強く争うことを好まない人でした。松岡が「三国同盟以外に難局打開の道はない」と強調すると、及川は「原則的に同意する」と答えてしまったのです。「原則的」などという慎重を期した意味合いの留保は、強引な松岡には通用しません。松岡は「四相会議で了解を得た」として、さっさとスターマーとの交渉に入ったのです。

松岡・スターマー会談は、九日夜と十日夜の二回、千駄ケ谷の松岡の私邸で極秘に行なわれました。スターマーは新聞記者に気付かれないよう、松岡邸のはるか手前で自動車を降りて、裏口から入るという用心深さです。スターマーが終始強調したのは、「ドイツがこの条約に期待するのは、アメリカの参戦阻止であって、対英戦争について日本の軍事的援助を求める意思はない」。これに対して松岡は、松岡一流の外交テクニックでしょう。軍事同盟には全く触れずに、「三国の勢力範囲をお互いに認め合い、相互に協力しよう」。こんな抽象的な提案でしたから、スターマーは「ドイツは軍事同盟を考えている」と強い不満を表明します。松岡の狙い通りでした。そしてスターマーは、日ソ関係の調整に「オネスト・ブローカー」という言葉を使って、「ドイツは正直な仲買人の役割を演ずる用意がある」と申し出たのです。それは、松岡を有頂天にさせるものでした。斎藤に「一片の疑いを持っていたドイツ仲介による日ソ国交調整に、これで大きな希望を持てるようになった」と言ったそうです。

こうして、わずか二日間で条約の大枠が固まりました。その陰には、陸軍とドイツ側の圧力もありました。武藤軍務局長は、斎藤に「同盟締結は急を要する」と言って、「もし近衛や松岡にそれが出来ないなら、辞めてもらうより外ない。この問題の前に近衛も松岡もあったものではない」と脅します。スターマーもまた「交渉は絶対秘密を要する。交渉が長引けば秘密は自然に漏れ、日ソ国交調整も

出来なくなる」と、日本側の早急な決定を迫ったのです。

問題は、軍事同盟には依然反対が根強い海軍を、どうやって説得するかです。条約案では第三条で「三国のいずれか一国が、現在欧州戦争または支那事変に参入していない一国によって攻撃されたときは、三国はあらゆる政治的、経済的、及び軍事的方法により相互に援助すべきこと」を約束し、自動参戦を義務付けています。この一国がアメリカを指していることは明らかで、現実問題としてドイツがアメリカと戦争になれば、日本はこの条約によってアメリカと戦わなければならないことになります。

海軍次官には豊田貞次郎中将が就任していましたが、松岡と個人的に親しく、やがて近衛内閣で商工大臣、外務大臣になったように、頻繁に近衛詣でをするほど政治的な軍人でした。何しろ次官になって最初にやったことが、次官室の壁に自分をはじめ歴代次官の名前を書いた木札を、ズラリと並べたことだったというのです。自己顕示欲が強く、出世第一主義者。口も八丁、手も八丁で、軍人というよりは能吏。海軍部内では、誰言うとなく「豊田大臣、及川次官」と言っていたそうです。豊田は、海軍の条件として自動参戦条項を外させ、同盟締結に持っていくことで、自分の存在を認めさせたかったのでしょう。三ヵ所の海軍修正案を持って、密かに松岡を訪ねたのです。松岡は「自動参戦の問題を条約本文から外すと、条約そのものが弱くなる」と難色を示し、その代わりに「条約本文のほかに付属議定書と交換公文をを作り、その中で参戦は各国政府の自主的判断によるという規定を置くがどうか」と、妥協を求めました。松岡がスターマーと協議した結果、ドイツ側も海軍の要望していた三点を、オット大使から松岡外相宛ての書簡の形で盛り込むことに同意したのです。

それは「締約国が攻撃されたかどうかは、三国間の協議により決定されるのは勿論である」という内容です。参戦するかどうかは、日本の判断が優先されるのですから、第三条の与える威嚇的効果は実質的には骨抜きになります。及川も豊田から説得され、「そういうことなら、これまで海軍が反対してきた理由は全てなくなった」と、同盟賛成に回りました。しかし実際は、このオット大使の書簡は、スターマーの全くの独断であり、条約締結を急ぐための、その場限りの約束でしかなかったのです。リッベントロープ外相には、何一つ報告していませんでした。対米戦争は日本の真珠湾攻撃で始まりましたから、問題になりませんでしたが、もしドイツが先に対米戦の火蓋を切っていたら、日本に自動参戦を要求して、大問題になっていたでしょう。

及川は十五日、海軍首脳会議を開いて三国同盟に同意を求めました。「海軍が反対すれば、近衛内閣は総辞職のほかなく、海軍としては内閣崩壊の責任をとれない」。だから「同盟条約締結に賛成願いたい」と言うのです。連合艦隊長官の山本五十六はすっくと立ち上がって、「私は大臣に対しては、絶対に服従するもの

であります。大臣の処置に対して異論をはさむ考えは毛頭ありません」。海軍には「政治に関わるのは大臣一人」という伝統があったからですが、こう前置きして「ただし一点、心配に堪えぬところがありますので、それをお尋ねしたい。昨年八月まで私が次官を務めていた当時の企画院の物動計画によれば、その八割までが英米勢力圏の資材でまかなわれることになっていたが、今回三国同盟を結ぶとすれば、必然的にこれを失うはずであるが、その不足を補うためどういう物動計画の切り替えをやられたか。この点を明確にし、連合艦隊長官としての私に安心を与えて頂きたい」。強い懸念を表明したのですが、及川はこれには答えず、「いろいろご意見もございましょうが…」。すると、予め根回ししてあったのでしょう。最古参の軍事参議官大角岑生大将が「私は賛成します」と口火を切り、バタバタと賛成に決まってしまったのです。会議の後で及川が山本に、「事情やむを得ないものがあったのだ。勘弁してくれ」と言うと、山本は「勘弁ですむか」と凄い形相で及川に詰め寄ったと言われます。

こうして同盟条約案は、十六日の臨時閣議で決定され、十九日の御前会議で承認されたのです。同盟には反対だった伏見宮軍令部総長と枢密院議長原嘉道が、対米関係、重要資源、特に石油の確保、参戦の主体性について懸念を指摘しましたが、政府側に押し切られ、伏見宮から「日米開戦の回避に万全を尽くすように」との希望が出ただけで、会議は終わりました。それでも近衛首相も、海軍の余りにあっさりした賛成に不安になったのでしょう。豊田次官を呼んで海軍の真意を尋ねると、豊田はこう答えたのです。「海軍としては、反対であることに変わりはないが、陸軍との関係、それに国内の政治情勢を考えると、海軍があくまで反対の態度を持ち続けることは不可能で、止むを得ず賛成する。それは政治的考慮であって、純軍事的となると日米戦争になっても全く確信は立たない」。

驚いたのは近衛です。「これは真に意外なことを承る。国内政治のことは、われわれ政治家が考えるべきことであって、海軍は政治的考慮から離れて、純軍事的な立場から検討してほしいのだ。確信がないなら反対すべきではないか」。こう問い詰めると、豊田は「今日となっては、海軍の立場も了承してほしい。ただ同意はするが、三国条約における軍事上の援助義務が発生しないよう、外交の手段によって防止する他はない」。

及川も豊田も、「対米戦の危険」より、陸軍との対立、国内世論の反発を恐れたのですが、「海軍は伝家の宝刀、軍部大臣現役武官制の宝刀を抜くべきだった」と言うのは、井上成美です。「海軍大臣が身を引くか入閣を拒否すれば内閣は成立せず、軍事同盟は締結出来なくなる。この伝家の宝刀の乱用は慎むべきではあるが、国家大事の際は断固として活用すべきだった。我々が三国同盟に徹底して反対し続けてこられたのも、この宝刀の切れ味を知っていたからだった」と言うのです。近衛は、豊田の答えにますます不安になったのでしょう。荻外荘に山本を

招くと、連合艦隊長官として日米開戦になった場合について尋ねたのです。山本は「是非やれと言われれば、やる。半年か一年の間は暴れられるが、二年、三年と長くなると全く確信は持てない。三国条約が成立する以上、日米戦争を回避するように努力してほしい」。こう答えたのですが、井上は「あれは山本の失言だった」。かつて米内光政が「日本の海軍は、英米を向こうに回して戦うようには建造されてはおりません」と言い切ったように、「とても戦えない」と、明確に否定すべきだったと言っています。

昭和天皇も、この同盟が日米戦争になりはしないか、と心配されました。十六日の臨時閣議決定の後、参内した近衛に「今しばらく、独ソの関係を見極めた上で、締結しても遅くはないではないか」と聞かれています。天皇の方がよっぽど独ソ関係をよく見ていたわけですが、近衛も松岡も、独ソの友好関係は続いていると思い込んでいるのですから、話になりません。近衛が「この同盟は日米戦争を避けるためであって、この同盟を結ばなければ日米戦争の危険性はより大きくなるのです」。こう言うと、天皇は沈痛な表情で「総理は自分と苦楽を共にしてくれるか」と言われたそうです。近衛は「及ばずながら誠心誠意ご奉公申し上げます」と答えましたが、天皇はそれからの日本の苦難の道を予感されていたのでしょう。

元老の西園寺は、「あいつらが国をどこかへ持っていってしまう。こっちに何の断りもなく」と、うわ言のように呟いたといいます。そして女中頭と目が合うと、「これで日本は滅びるのや。お前さんたちも、畳の上で死ねないようになってしまった」と言ったまま、床の上で瞑目して一言も発しなかったそうです。西園寺の嘆きをよそに、条約期間十年の三国同盟は、九月二十七日ベルリンの総統官邸で調印されました。朝日新聞は「今ぞ成れり“歴史の誓”めぐる酒盃、万歳の怒濤」。こんな最大級の賛辞で拍手を送りましたし、東京では祝賀行進が行なわれ、日の丸とカギ十字の小旗がはためきました。

日本国内は歓迎一色でしたが、三国同盟と歩調を合わせたように北部仏印への武力進駐が行なわれ、日米関係はますます抜き差しならないものになっていったのです。当時、重慶の蒋介石政権に武器弾薬や軍需物資を送るルートとしては、仏印を通るものが最大でした。陸軍はフランスが降伏すると、この援蒋ルートの遮断を申し入れ、仏印総督も自発的に閉鎖したので、西原一策少将を団長とする監視団をハノイに派遣していました。そして「時局処理要綱」に基づく南進政策の第一歩として、松岡外相とアンリ・フランス大使の間で交渉が行なわれ、「日本は仏印の領土保全を保障し、フランスは日本軍の仏印への進駐を認める」。こういう協定が八月三十日に成立し、大本営も武力を使わない平和進駐の方針を決めていたのです。

進駐日時、兵力については、現地で西原少将が交渉を続けましたが、この進駐

を足掛かりに武力南進に持って行こうと画策したのが、作戦指導に来た参謀本部作戦部長の富永恭次少将と南支那方面軍の参謀副長佐藤賢了大佐です。なかなか話し合いが纏らず、協定不成立の場合、武力進駐のタイムリミットは「九月二十三日午前零時」とされましたが、西原が奔走し前日の二十二日午後四時半、仏印軍司令官との間に協定調印に漕ぎ着けたのです。内容は、トンキン州の飛行場使用や日本軍のトンキン州通過を認め、駐屯兵力は六千人以下、日本軍の進駐は二十三日午前六時から行なわれることになりました。西原は直ちに大本営はじめ関係方面に「交渉成立」を打電、中国国境に待機していた南支那方面軍の第五師団にも連絡員を派遣して、夜八時には「武力進駐中止」の連絡は終わっていたのです。沢田参謀次長は参内して「平和進駐」を上奏、直ちに「武力進駐中止」の命令を出しましたし、陸軍大臣の東条も「たとえ進駐が遅れても友好的に実施すべきだ。そのため進駐が二、三日遅れても差し支えない」と言っていたくらいです。

ところが第五師団は二十三日午前零時、予定より六時間も早く越境を開始、ドンダン要塞を攻撃して仏印軍との間で戦闘が始まってしまいました。進駐主力部隊の西村兵団も、二十六日にハイフォン港の埠頭から上陸する予定になっていたのですが、西村琢磨少将は第五師団の戦闘を聞いて敵前上陸、つまり戦闘隊形をとって上陸すると主張し、海軍の護衛艦隊に上陸地点の艦砲射撃を要求します。報告を受けた第二支那派遣艦隊長官の高須四郎中将は、護衛艦隊指揮官に「陸軍部隊の強行上陸は承認出来ない。中止を協議し、応諾せざれば協力不可能の旨を伝え至急出港離脱せよ」と命令しました。しかし西村少将は「陸軍の命令系統によって中止命令が来なければ、強行上陸を中止するわけにはいかない」と聞きません。大本営の「進駐は友好的に実施するものとす」、この命令は南支那方面軍司令部に入電していたのですが、富永と佐藤が軍司令官にも見せず、独断で握り潰したのです。南進の基礎を固めるため、武力進駐で日本軍の既得権を少しでも増やしておこうとしたのです。

西村兵団が未明から上陸用舟艇による敵前上陸を始めると、高須中将は護衛艦隊に護衛任務を打ち切らせ、海南島に引き揚げさせてしまいました。海軍の「陸軍部隊置き去り事件」と言われるものですが、西原少将は陸軍省に「統帥乱れ信を中外に失う」と打電しました。第二支那派遣艦隊の上級司令部である支那方面艦隊参謀長の井上成美少将も、海軍中央部に厳しい意見電報を打っています。「不逞分子が火をつけた作戦への協力は無意味だと考えている。このような無名の戦争を惹き起こさせないよう、この上とも御努力頂きたい。一時の陸海軍間の摩擦を避けるため国の大事を誤り、うやむやに葬られることがないよう、とくに御配慮を煩わしたい」。

陸軍も放っておけず、陸軍大臣の東条は二・二六事件以来と言われる大規模な粛軍人事を行なっています。命令不徹底の責任を取らせる形で閑院宮参謀総長、

沢田参謀次長を更迭、南支那方面軍司令官の安藤利吉中将を予備役に編入しました。首謀者の富永、佐藤も一時的に左遷されましたが、「東条腹心」と言われた二人には甘いのです。富永は半年後に陸軍省人事局長に返り咲き、一年後には中将に進級して陸軍次官。佐藤も軍務課長、軍務局長と栄進の道を歩みます。

米軍のフィリピン上陸作戦が始まったのは昭和二十年一月ですが、陸軍のクラーク基地からは特攻機が次々と飛び立ちました。ニュース映画や新聞には、「諸君だけを死なせるものではない。富永も最後の一機で必ず突入する。どうか安んじて出撃してもらいたい」。こう言って、軍刀を振り回しながら特攻機を見送る第四航空軍司令官富永の姿が、盛んに紹介されたものでした。ところが富永は、自分だけさっさと台湾に逃げてしまったのです。参謀たちは、富永の命令でしょう。軍司令部の台湾移動を働き掛けましたが、上級司令部の移動命令はなかったのですから、陸軍刑法で最高刑死刑に相当する「敵前逃亡」であることは明らかでした。しかし、この時も陸軍は、富永を予備役に編入しただけ、二ヵ月後には満州の師団長にしています。もっとも、そのお陰で十年間のシベリア抑留生活を送ることになりますが、日本の陸軍を誤らせたのは、こうした視野の狭い強硬論者を中央の要職に据え、しかも統帥の乱れを放任したことにありました。

アメリカは、北部仏印進駐、三国同盟に敏感に反応しました。九月二十五日、蔣介石政権に二千五百万ドルの借款供与を決めると、翌日には屑鉄の対日輸出を全面的に禁止したのです。ノックス海軍長官は「三国条約はアメリカを直接の対象とし、脅迫しようとしている。だが、もし相手が戦争を望んでいるのなら、やらせればよい」。こんな敵意むき出しの演説をしましたし、十一月に圧倒的多数で三選されたルーズベルト大統領も、ラジオで国民に向けて「われわれは参戦しないが、民主主義の大兵器廠とならねばならない」と語り、イギリスも一時閉鎖していたビルマ・ルートを再開しました。

実はこの時、日本の外交に致命傷を与える事態が起きていたのです。外務省は海軍が昭和十二年に開発した「九七式欧文印字機」、皇紀二五九七年に採用した暗号機械を譲り受け、十四年二月から在外公館に配置していました。機密度の極めて高い、外務省自慢の暗号機械でしたが、「暗号の天才」と言われたフリードマンによって解読されてしまったのです。三国同盟調印の二日前、九月二十五日のことで、アメリカは「パープル、紫暗号」と名付け、実物そっくりの模造機を八台も作ってしまいました。これ以後アメリカは、日本の指導部が何を考え、何をしようとしているのか、出先外交機関との交信を通じて手に取るように知ることになったのです。しかも日本は、そのことを全く知らずに敗戦まで同じ暗号機械を使い続けたのですから、事態は深刻でした。アメリカ政府は日本の肚の中を正確に知った上で、日本が何かするとカウンターパンチを繰り出してきます。それを見て日本が次の手を打つと、たちまちアメリカも打ち返してきます。日本国内の反

米感情は高まり、こんな危険なシーソーゲームの行き着く先は、戦争ということになるのです。

昭和十五年は、皇紀二千六百年に日本中が沸いた年でした。十一月十日、皇居前広場に四万九千人を集めて大祝賀式典が開かれ、街頭至る所に「祝へ！元気に朗らかに」。こんなポスターが貼られ、東京では花電車が走り、提灯行列も繰り出しました。しかし、支那事変は続き、物価も高騰し、国民生活は年々重苦しさを加えています。「金鵄かがやく日本の　栄ある光身に受けて」――この国民奉祝歌を煙草値上げにひっかけて、「金鵄あがって十五銭　栄ある光三十銭」と歌ったのです。そして最後の元老西園寺公望が亡くなったのは、それから間もないは十一月二十四日、九十一歳でした。臨終一時間前にふっと目を開いて、「おい、顔のヒゲがのびたから剃ってくれ」。若い頃フランスに九年間留学し、「パリっ子以上にパリっ子」と言われた西園寺らしく、死の旅立ちの準備を整えると、そのまま眠るような大往生だったそうです。

日本は、明治、大正、昭和と、三代にわたる大きな舵取りを失ったわけですが、山本五十六は西園寺の秘書役原田熊雄と会食した時、三国同盟に「実に言語道断だ」と、怒りをぶつています。「自分の考へでは、アメリカと戦争するといふことは、ほとんど全世界を相手にするつもりにならなければ駄目だ。要するにソヴィエトと不可侵条約を結んでも、ソヴィエトなどといふものは当てになるもんじゃない。アメリカと戦争してゐる内に、その条約を守って後から出てこない、といふことをどうして誰が保証するか。結局自分は、もうかうなった以上、最善を尽して奮闘する。さうして長門艦上で討死するだろう。自分が長門艦上で討死するころには、東京あたりは三度ぐらゐまる焼けにされて、非常なみじめな目に会ふだらう。さうして、結果において近衛だのなんかが、気の毒だけれども、国民から八裂きにされるやうなことになりやあせんか」。近衛は自殺でしたが、日本はまさに山本の予言通りになります。

吉田茂は癇癪玉を破裂させて、近衛に絶縁状を送りました。「そもそも支那事変が思うように片付かないのは、助けにならぬ独伊を頼ったからだ。近衛を擁する輩の多くは、近衛によって功を急ごうとするもので、真に憂うべき情勢に候」と書いています。もっとも吉田は、日米開戦で「この戦争を終わらせるのは、やはり近衛しかいない」と仲直りし、終戦間際には近衛と和平工作を進めることになります。外交界の長老、元外相の石井菊次郎も、三国同盟が枢密院で審議された時、「歴史の教えるところでは、ドイツは最も悪しき同盟国だ」と、強い懸念を表明しました。「ドイツ国あるいはその前身たるプロシア国と結んだ国で、その同盟により利益を受けたもののないことは、顕著な事実である。のみならず、これがため不慮の災難を蒙り、社稷を失うに至った国すらある。ドイツ宰相ビスマルクはかつて、国際同盟には一人の騎馬武者と一匹の驢馬とを要す。そうしてド

イツ国は常に騎馬武者でなければならぬと、言っている」。ヒットラーにとって日本は、まさに「一匹の驢馬」だったのでしょうか。

明治の日本は、ドイツから様々な恩恵を受けて近代国家に成長しました。明治憲法も政治体制もそうでしたし、明治九年に来日したベルツは三十八年に帰国するまで東大医学部で教鞭をとり、日本の近代医学の基礎を築きました。科学技術をはじめ芸術、音楽とその影響は測り知れないほど大きなものがありましたが、中でも日本陸軍です。明治の陸軍は最初幕府にならってフランス式を採用していましたが、明治十八年、ドイツの参謀少佐メッケルを陸軍大学校の教官に招き、兵制、戦術をドイツ式に切り替えていったのです。日露戦争で活躍した軍人は、みんなメッケルの教え子でした。昭和の日本を操ったのは陸大閥ですが、陸大卒業生のうち成績優秀な一割ほどが諸外国に派遣されました。ドイツが百五十人と圧倒的に多く、フランス九十人、ソ連八十人に対してイギリス五十五人、アメリカに至っては四十人と、アメリカに極めて薄い海外駐在システムになってしまいました。東条も武藤もドイツ駐在組ですが、これが日本陸軍にドイツ信奉、アメリカ軽視の風潮を生み、何度裏切られてもドイツ勝利を信じてしまったのです。

陸軍のドイツ贔屓は分かるとして、どうして国民までが「ドイツ一辺倒」になってしまったんでしょうか。ヒットラーは巧妙でした。支那事変最中の昭和十三年五月、満州国を正式に承認したのです。満州事変以来、国際連盟で満州国を否定されると連盟を脱退し、国際的孤立感を深めていた国民は、それこそ百万の味方を得たような気分になってしまいました。八月には、ナチ党の青少年組織であるヒットラー・ユーゲント三十人を派遣してきたのです。マスコミは東京駅前の歓迎式を「姿頼もしく湧く歓呼 親愛溢るる駅頭 彼我胸震ふ交歓会」。こんな美辞麗句で伝えましたし、帰国するまでの三ヵ月間、どの新聞も連日トップ扱いで国民の親独熱を煽りました。三国同盟推進の絶好のプロパガンダとなったのです。

松岡は日米開戦の昭和十六年十二月八日、結核にかかっていて病床にありましたが、斎藤良衛が訪ねると、「三国同盟は、僕の一生の不覚だった」と嗚咽したそうです。「三国同盟は、それでアメリカの参戦を防止し、世界戦争が起こるのを予防し、世界平和を回復し、国家を泰山の安きにおこうとしたものだ。それが事志と違い、それを思うと、死んでも死にきれない」。そして「戦争だけは避けたかった」と繰り返したと言います。ところが、そんな後悔も束の間、二日後には真珠湾攻撃の大戦果に、徳富蘇峯に宛てた手紙で「実に痛快、壮快！唯戦へ、唯闘へ、闘ひ抜いて勝て！」と舞い上がっているのです。これは平成十八年五月、徳富蘇峯記念館の書庫を整理していてこの松岡の手紙が見つかったのですが、冒頭で日米交渉が決裂して開戦に至ったことを「天祐」と書いているあたり、状況次第でコロコロ変わっています。松岡の信念がいかに場当たり的なものだったか、また外交官に大切な透徹した判断力のなかったことを物語っています。

松岡は開戦九ヵ月前の昭和十六年三月十二日、その頃はまだ元気一杯で、ドイツ、ソ連訪問の旅に出ました。松岡外交の総仕上げとして、日ソ中立条約を結ぶためです。しかしヒットラーの方は、すでに前年の十五年十二月十八日、「バルバロッサ作戦」と呼ばれるソ連攻撃の準備命令を出していたのです。「ドイツ仲介による日ソ国交調整」は最初から空手形だったのですが、この話は来月「日ソ中立条約と日米交渉始まる」というテーマでお話します。